

迫田圭 ピアノ四重奏曲第1番

ケージにまつわる（それにプラスして観客参加型的な）作品を、というコンセプトによって書いた作品。

観客参加型でということだが、今回は観客も奏者も互いに「聴く」という行為に対して、いつも以上に重点を置くような作品にした。

第1楽章はかなり自由な12音技法を用いて作曲した。音ごとに使用する音高をある程度制限し、楽器の組み合わせを変えることで音色を変え、打楽器的なサウンドを作り出すことを試みた。この12音音列は分解されつつも、曲の終わりまで共通して使われる。

第2楽章はピアノの持続するモチーフの上で弦楽器3人が自由に即興をつなぐ。ピアニストはしばしば演奏会場の環境音に呼応してストップしたり、短い即興を挟んだりもする。ピアノパートに応じて即興パートにも若干の制約を課した。

ピアノの持続と即興が完全に停止したところからが3楽章。全奏者が環境音に応じて、小さな音で短い音価を演奏する。前半と後半で短い音価を演奏するための条件を少し変えた。

ヴァイオリンの大きな「ミ」の音が4楽章の始まりの合図。音列を分解し、白鍵系の音と黒鍵系の音に分けたが、音列の順番は第1楽章とは変えていない。弦楽器群は2分程度のセクションを3回繰り返す。ピアノパートは、回を重ねるごとに少しずつ変化していくが、3回とも必ず演奏しなければならない音が所々に散りばめられている。変わっているのか変わっていないのかよくわからない風景を「聴く」作品を目指した。

第4楽章の開始音と同じ「ミ」の音で何度か呼応しあった後、最終楽章に入る。弦楽器3人は、指定されたいくつかの音の中からその場で一つずつ音を選び、一つの旋律を奏する。弦楽器の旋律が終わったら、ピアノが同じように一つの旋律を奏する。弦楽パートはそれを聴きながら、いくつかの決められたリズムパターンで即興的な伴奏をする。

演奏者とは何か、演奏会とは何か、聴衆とは何か、はたまた作曲するとは何か、このようなことを深く掘り下げていくと、ジョン・ケージという岩盤にぶち当たる。音楽家である以上、常日頃から考えさせられるこれらの問題に、回答が出せたとは言わないが、一つの在り方を提示くらいはできたのかなと思う。このような考えを実践できる貴重な機会をいただけたことに感謝したい。